

[制作記録]

染色作品の空間への展開 - 2つの展覧会に至る思考のプロセス -

Approaches of Dyeing Works to Spaces : Thinking Process for the Two Exhibitions

加賀城 健
KAGAJO Ken



(写真1) 「Young Views—噴水、泉、気多」布サイズH115×W1000(cm)を3枚組
広島市現代美術館での展示風景、2017年制作

1. はじめに

本制作記録は、2017年12月から2018年3月まで広島市現代美術館で開催された「交わるいと『あいだ』

をひらく術として」¹と2018年10月に染・清流館²で開催された3人展「行為と現象Ⅰ」³の2つの展覧会で発表した自作の制作と展示の記録を中心に、過去作からの現在までの過程をたどり検証するものである。



(写真2) 「Young Views—意識のスライダー」布サイズH115×W800(cm)を6枚組
染・清流館での展示風景、2018年制作

2. 作品タイトルについて

2つの展覧会で発表した新作には『Young Views』とメインタイトルを付けている。本タイトルの作品シリーズは2016年からスタートした。タイトルの由来は、当時授かった我が子の成長をみるなかで、子供にとって、日々の生活の大半をはじめの経験が占めるのだと頭をよぎったことにある。自身年齢を重ねるにつれ、経験から感動や刺激を得ることは難しいと感じるが、常に子供の頃感覚を呼び起こすよう努めながら、生じる心身の変化を制作に導入し続けることで、作品に永続的な新規性と現在性を持ち込もうと考えた。その意思表示が『Young Views』という冠である。『Young Views』シリーズの基本には、それ以前に取り組んでいた2つの作風がある。次項でその2作風を説明する。

3. 過去の2作風

『Strokes』シリーズ

ひろげて固定した布の上に防染糊⁴をのせ、1m前後のスキージ⁵で糊をアドリブで引きずった自身の行為の痕跡が、その後の染色により模様になる作品群である。染色の方法は引き染めを採用している。引き染めは布を両端から張木⁶で引っ張り、水平に固定した状態で刷毛を使って布の端から端まで一気呵成に染め上げる、日本ならではの伝統的な染色法である。反物一反をムラなく無地染めすることはこの引き染めの習熟で可能になる。1998年から制作を開始した『Strokes』シリーズは、最も滲みの現象が出やすいと判断した青系の染料⁷を中心に、引き染めにて単色で染めあげる作品が中心である。



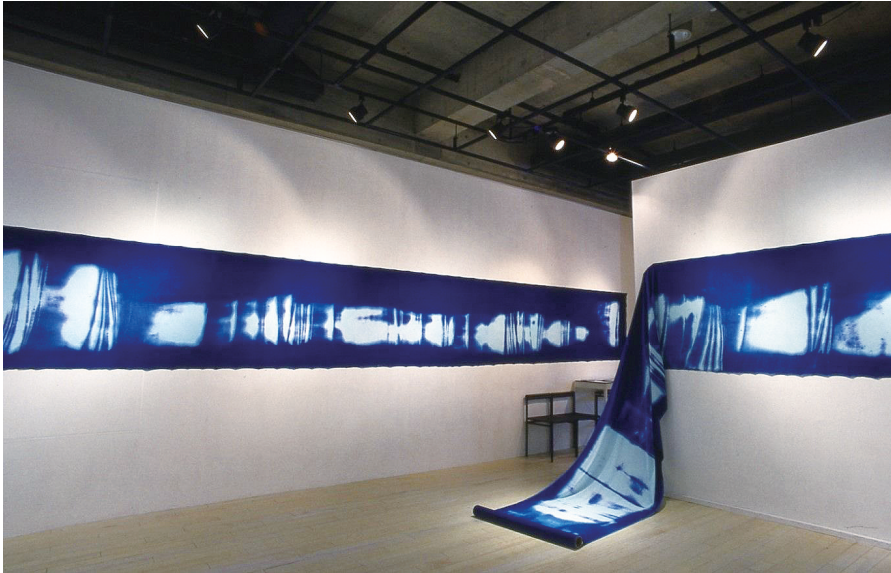
(写真3) 制作に使用する防染糊とスキージ



(写真4) スキージで糊を引きずる制作風景



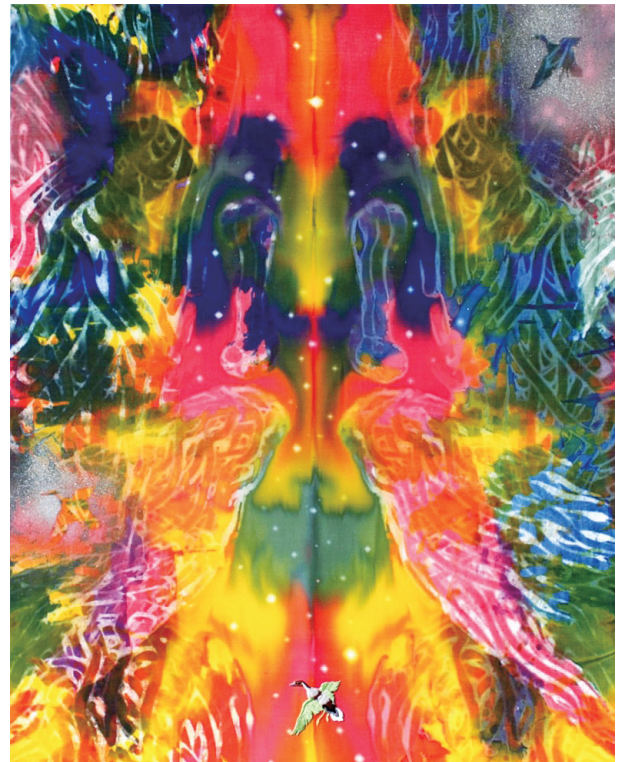
(写真5) 引き染めの制作風景



(写真6) 「25メートルのストローク」
ギャラリーマロニエでの展示風景
2002年制作

多色平面作品シリーズ

2009年発表の作品より、以前のように単色ではなく多色を用いて染色し、仕上げた染色布を木製パネルに張り込んだ平面作品の制作へと移行した。糊は指を使って布に擦り付けるものと、ひろげて固定した布の上からまき散らす方法が主になった。染色法に関しても前述の『Strokes』シリーズとは違い、多色の染料を小さな刷毛で糊置き済みの布にアドリブで染み込ませる手法をとった。これにより染色後に色の異なる染料が動いてせめぎ合い、糊との関係も影響しながら、自然に模様をつくる現象を引き出そうと試みた。作品を個展やアートフェア等で販売するプライマリーギャラリーとの関係により手掛けるようになった平面作品であるが、これらの制作のなかで平面作品としての布の有効性を考える機会を得た。



(写真7) 「ライゼ」 2011年制作

4. 染色と絵画の違い

パネルに布を張る染色作品は絵画とどう異なるのか。絵具や顔料を使う絵画作品は、基本パネルや枠に張った麻や綿布のキャンバスに描かれる。支持体は主に布を使用することから染色作品と同じと言える。その後絵画は支持体に下地をつくり物質が付着する基板とする。その上から絵具や接着剤となるメディウムを加えた顔料を描き重ねてイメージとマチエールを形成し、実質的に重量も増加する。染色に極めて近い絵画技法であるステイニング（布に絵具や顔料を染み込ませる）をゼロ地点とすると、描けば描くほどゼロ地点から布に物質とマチエールが増加するのが絵画であると言える。染色の場合、制作時にパネルや枠に布を張った完成形から仕事をする訳ではないが、例えば糊を置いたり、染料で染めたりする数々の仕事が積み重なっても、色の定着作業をして水で糊と未定着の染料を洗い流せば、布の表面に物質としては何も付着せず残らない。そのように、布に染模様やイメージが表現されても布の表面には平面性が保たれていることを魅力として捉え、表面上付着物のない布を、パネルや木枠に力一杯引っ張って固定した際の張り詰めた平板な状態に、染色平面作品ならではの特性を見出す作品づくりを自作において目指すこととした。

布の奥に空間をつくる

染色布をパネル張りした作品は、張ってある布が繊維を織ったものであるという構造上布のなかを空気が通い、また薄い布の場合支持体が透ける。その分、画面に顔料が付着している絵画とは光のはね返り方が異なり視覚効果が柔らかい。パネル張りの自作を検証するなかで、表面の染色布の奥に視覚的な奥行きや錯覚をつくり出せると考えて考察を繰り返した。その1つが表面にくる染色布とパネルのあいだにアルミ箔を仕込むというものである。強く光を反射するアルミ箔の上を布で覆うと、観者がみる角度を変えることで画面が光り、染模様がぶれてみえる視覚効果を作品画面の奥に感じさせることができ

る。広島市現代美術館での展示にはこの研究を採用した。その後の染・清流館では、布を重ねることで生まれるモアレ⁸の視覚効果を展示作品に取り入れて作品を組み立てた。以下にそれぞれの染色方法と展示方法について報告する。

5. 広島市現代美術館用の作品制作と展示

染色方法について

展覧会担当学芸員との打ち合わせにて新作の制作が要請された。『Young Views』シリーズとなるこの作品は、3. 過去の2作風で述べた『Strokes』シリーズのスキージを使った糊置き後、多色平面作品制作から採用していた多色の染料によるカラフルな色使いを採用した。さらに染色法は小さな刷毛を使って染料を染み込ませる方法から、糊置き済みの布を任意の形態にバットに仕込み、多色の染料をかけて染める方法に変更した。これにより作者が制作をコントロールできる割合が減り、意図できない偶然性による模様がでる可能性が増した。また染料をかけることにより、染料が布の裏にまわることで、布の表から染まる色と裏から染まる色ができ、薄い布のなかでも生地の厚みを感じさせる視覚効果を生む結果を得た。巾115cm×1000cmの綿布を計6枚制作し、内3枚を展示に採用した。



(写真8) 糊置き済みの布をバットに仕込む



(写真9) 多色の染料をかけて染色する

展示方法について

展示に関して、美術館からは自身の取り組みを踏まえて、展示室の隅を含んだ壁面を展示場所として与えられた。布の特性を活かすための展示方法として、空間の隅を使った展示を過去に何度も行ってきた経緯がある。今回は美術館の壁面自体を染色布の支持体に見立てることとし、まず壁面にでんぷん糊でアルミ箔を作品サイズに貼り込み、その上に染色布を針ピンで引っ張って固定するインスタレーションで合意を得て、3日間をかけて展示作業を行った。



(写真10) 壁面にでんぷん糊を塗り、アルミ箔を貼る



(写真11) アルミ箔を貼り終えた状態



(写真12) アルミ箔の上から染色布を張る

6. 染・清流館用の作品制作と展示

染色方法について

糊置きの方法、染色法ともに広島市現代美術館用作品と同様である。異なる点は、染・清流館の会場が染色作品の保護保存に重きをおくために、照度50ルクスの関節照明のみで空間を照らすというコンセプトを持っている。会場に入った観者は目が慣れるまでやや薄暗さを感じることを想定し、作品に染色する染料濃度を上げて視覚に対する刺激を高めるように心掛けた。巾115cm×8000cmの綿布を計6枚制作し、展示に6枚採用した。

展示方法について

間接照明のみの空間でも、広島市現代美術館と同様に支持体にアルミ箔を仕込んで視覚的效果を得ることができるのかという検証が必要となり、事前に同条件の関節照明下で実験を試みたが、前方からの光源がない限り、求めるような視覚的效果を得ることは難しいとの結論に達した。そこで長さ8000cmで制作した染色布を二つ折りで4000cmとして、下部の布折り畳み部分に重量のある鉄棒を仕込んで、引っ張って展示することにより、生じるモアレの視覚的效果を引き出すこととした。同館の壁面高からすれば必要以上の長さの作品を用意し、敢えて布の展示において自然と思われる状態より、床に設置する布先を前にせり出すことによって、布と壁面のあいだに観者が入れる空間をつくり、二重に重なった染色布を表からと裏からの両面鑑賞できるように設定した。これにより表からは染色で現れた染模様を明瞭に鑑賞することができ、裏にまわると空間を満たす間接照明の光が、二重の布を透過する際に生じさせるモアレを体感する展示空間となった。



(写真13) 折り畳んだ布の下部に仕込む鉄棒



(写真14) 布の上部を針ピンで固定する



(写真15) 裏からみる作品のディティール



(写真16) 観者が入れる空間

7. おわりに

染色におけるパネル作品の研究としてはじめての平面の内側に奥行きや視覚的効果を生み出す取り組みを、2か所の美術館で検証することができたのは大きな収穫と言える。今までパネルや木枠の中で成立していた表現を、空間を支持体とした独自の平面作品として成立させることができた。広島市現代美術館の展示では、支持体である壁面に染色布を可能な限り引っ張ってピン打ちで固定したため、付着物のない平らな面を美術館の壁面と面一で設置し、その奥に視覚的に奥行きを生み出すことができた。染・清流館の作品も、当初は床と接する鉄の棒を強く引っ張ることで、弛みのない言わば斜めにせり出した色の壁のごとき形態をつくり、表面の平面性を強調しようと試みたが、畳敷きの床を傷つけずに布を弛みなく張れるほど、鉄棒を強く引き固定することが困難であった。そのために染色布が弛んだ分、布の物質感と柔らかさや各布の端部分に自然なドレープを生み、表からは色彩と素材感、裏からは色彩とモアレ現象が強調される作品となった。

染・清流館での3人展「行為と現象」は同館で3年に1度、計3回で開催の企画であり、次回は2021年に第2回展が開催となる。複数回の開催は、単発の企画ではなく作家の成長と未来への変化を観者に継続してみてもらいたいとの希望から実現した。第2回展に向けて、今回の発表作を踏まえた染色における平面表現と空間表現の、更なる融合を目指した作品の発表研究を進めたい。

註

- 1 広島市現代美術館の特別展。担当学芸員は同館学芸担当課長竹口浩司氏。糸や布、繊維を扱い制作をする15名と1組の作品を展示する。出品作家（敬称略、五十音順）は上原美智子、上前智佑、呉夏枝、加賀城健、北村武資、熊井恭子、鈴田滋人、須藤玲子、関島寿子、高木秋子、平野薫、堀内紀子、ヌイ・プロジェクト、宮田彩加、福本繁樹、福本潮子。
- 2 京都市中京区にある世界初の染色専門美術館。呉服の企画・製造・販売を手がける大松株式会社が、「日本の染色

アートを世界に向けて発信する」ことを目的として、2006年にオープンした。「染色のまち・京都」を拠点に活躍する作家100名の作品約500点を所蔵する。

- 3 染・清流館の企画展。キュレーターは深萱真穂氏。出品作家は井上康子、加賀城健、館正明。
- 4 糯米と糠を蒸してでできた柔らかい餅のような糊。染色の防染剤として使用する。文章中、以降、糊と記載する。
- 5 主にスクリーン捺染に使用する木製の板先にゴムをつけたヘラ。
- 6 布を宙に浮かせて張り、固定するための木製の道具。針を埋めこんだ棒と穴のある棒で布の端を挟み込む。
- 7 強アルカリ液で色を定着させる反応性染料を使用している。
- 8 モアレの起源は織物にあらわれた波型の模様であり、ふたつ、あるいはそれ以上の平行な繊維を重ねることにより発生する。印刷物、テレビ、コンピュータ画像上でも生じることがある。

（かがじょう・けん 工芸科／染色）

（2018年11月7日 受理）



(写真17) 「Young Views—噴水、泉、気多」ディテール



(写真18) 広島市現代美術館での展覧会風景、手前台置き作品も筆者作品



(写真19) 染・清流館での展覧会風景 1



(写真20) 染・清流館での展覧会風景 2